

古墳時代対応「資治通鑑」翻訳の意味  
小林恵子の仮説は成り立つか  
応神・仁徳・雄略はどこから来た？

令和3年7月11日

楯築サロン代表

全国邪馬台国連絡協議会副会長・中四国支部長

岡將男



# 勾玉の首飾り以来のテーマ

- 造山古墳は大王墓ではないか
- 雄略天皇時代の吉備反乱伝承の意味の追求
- 雄略天皇は百済の王族・昆支王ではないか。小林恵子の著作の様々に対して反論がない
- 吉備の古墳・吉備路を少しは世界に誇る観光地にできないか
- 仏教の知識は450年には倭国に到来していた



# 三国志時代から古墳時代は始まる

175年位卑弥呼生	181年 諸葛亮生	184年黄巾の乱
↓	↓	208年赤壁の戦
235年位臺與生	234年 諸葛亮死	
238年 卑弥呼魏に遣使	↓	238年公孫氏滅亡
247年 卑弥呼死	臺與立つ	
	266年 臺與晋に遣使	265年晋成立
	<b>313年 楽浪郡滅亡</b>	
369年百済と通行	380年苻洛の反乱	383年淝水の戦い
396年広開土王	395年参合陂の戦い	
420年倭五王		
479年倭王武上表文	<b>475年高句麗の百済侵略</b>	

# 三国志時代から将軍の時代1650年

- 漢の崩壊は184年の黄巾の乱がきっかけ
- 三国の英雄から将軍の時代が到来する
- 邪馬台国豊能時代は将軍の時代の始まり
- 高句麗好太王と応神天皇、好太王碑文
- 南北朝時代に「開府儀同三司都督・大將軍」
- 皇帝にならないまでも、幕府を開く(→江戸時代)
- 南朝宋から将軍号を貰い、地域の支配権を追認
- 478年倭王・武の上表文
- 日本列島では将軍の時代が続く、古墳時代
- 672年の壬申の乱以後、日本国成立・独自文化

# 資治通鑑 日本語訳PJ

TX「維基文庫、自由的図書館」

続国訳漢文大成

資治通鑑・古墳時代対応

学生の基礎教養  
現代語訳の基礎  
政治家の教訓

三国史記

日本書紀

中国朝鮮倭関連年表

関係性の検証  
吉備古墳再検討

現代地名

地政学的把握

GoogleEarth

観光利用 kmz

「勾玉の首飾り」の書き換え

# 資治通鑑

- 「資治通鑑とは」 Wikipediaから引用
- 中国の北宋の政治家・文人である司馬光が、1065年(治平2年)の英宗の詔により編纂した、**編年体**の歴史書。  
**1084年**(元豊7年)の成立。全294巻。
- 紀元前403年戦国時代～959年北宋建国前年1362年間
- 皇帝の「本紀」と諸侯・武将の英雄伝である「列伝」で構成される。通史把握、英雄伝は誇張・矛盾。
- 最も難関とされた南北朝時代は当時の史学研究の第一人者劉恕が担当。**劉恕**の史料収集は余りに完璧で、司馬光は自分では何もしなくてもよかったと言わしめたほど。  
**1932年に翻訳・国会図書館・入手不能**

- 「日本書紀」は編年体。
- 高麗の『三国史記』1145年に金富軾・撰、三国時代(新羅・高句麗・百濟)～統一新羅末期紀伝体で。「資治通鑑」を参考。
- 古墳時代の把握、**前燕・後燕の慕容氏と北燕の馮氏の東アジア諸国への影響をもっと把握するべ**
- **小林恵子の「興亡古代史」の諸著作の検証**
- 「魏志倭人伝」はたった2000文字。  
三国志の「魏書」の「東夷伝」の「倭人条」
- 資治通鑑87-144は、309-501年、現在58巻  
**61万字→124万字**。膨大なデータ
- 古代史・考古学の学生はまず読んでおくべき

# 神功皇后・応神天皇・住吉大社

- 神功皇后は幼い応神を連れて、大和の忍熊皇子たちの軍勢を破って、政権を立てたとす
- **小林恵子**は380年に苻堅に反乱を起こした、幽州(北京周辺)刺史の**苻洛**が西海に流されたあと、インド・百済から九州に上陸し、神功と組んで大和を制圧したとする
- だが383年の淝水の戦い後、再び自立した慕容垂が後燕を建て、北中国が大混乱中に、シルクロードの草原の道をたどったと考えたほうがいい

# 牛窓の語源、牛転び

- 塵輪鬼(ちんりんき)という頭が八つの怪物が王(仲哀天皇)の矢にあたり首が黄島(鬼島)、胴が前島(塵輪島)、尾が青島(尾島)になった
- 住吉明神が牛鬼を転ばし、からだは黒島(骸島むくろしま)、内臓が百尋岨(ももひろそわえ)になり、首が波歌山古墳(はかやまこふん)に埋められた
- 牛転び(うしころび)から、うしまろび～牛窓に地名が変化したらしいです
- 唐子踊りの歌の歌詞は言語不明  
もしかして苻洛の持ってきた言語かも

# 苻洛は座っても牛の奔るを制す

- 前秦の征北將軍、幽州刺史の行唐公の苻洛は、勇にして而して多力、能く坐して牛の奔るを制し、射て犁耳(鋤の耳は分厚い)を洞(つらぬ)く
- 自ら代を滅ぼす之功有るを以て、開府儀同三司を求め、得ず、是に由りて怨み憤る。
- 三月、秦王の堅は洛を以て使持節、都督益、寧、西南夷諸軍事、征南大將軍、益州牧と為し、伊闕より襄陽に趨き、漢水を溯りて而して上ら使む。
- 使者を分遣し兵を鮮卑、烏桓、高句麗、百濟、新羅、休忍の諸國に徴し、兵三萬を遣わして北海公の重を助けて薊(北京)を戍らしむ。

# 苻洛は西海郡(河西回廊)に一族流罪

- 夏, 四月, 苻洛は衆七萬を帥いて**和龍**を發す。
- 堅は怒り, 左將軍の武都の竇沖及び**呂光**を遣わして歩騎四萬を帥いて之を討たしむ
- 北海公の苻重は**薊城**之衆を悉くして苻洛と會し, 中山に屯し, 衆は十萬有り。
- 五月, 竇沖等は苻洛と**中山**に於いて戦い, 苻洛の兵は大いに敗れ, 苻洛を生きて擒とし長安に送る。
- 苻重は走りて薊に還り, **呂光**は追いて之を斬る
- 屯騎校尉の石越は**東萊**より騎一萬を帥いて, **海に浮かびて**和龍を襲い, 平規を斬り, 幽州は悉く平らぐ。堅は洛を赦して誅さず, 涼州之西海郡に徙す。

西海に流罪

百濟經由倭国へ

380年苻洛の乱

前涼

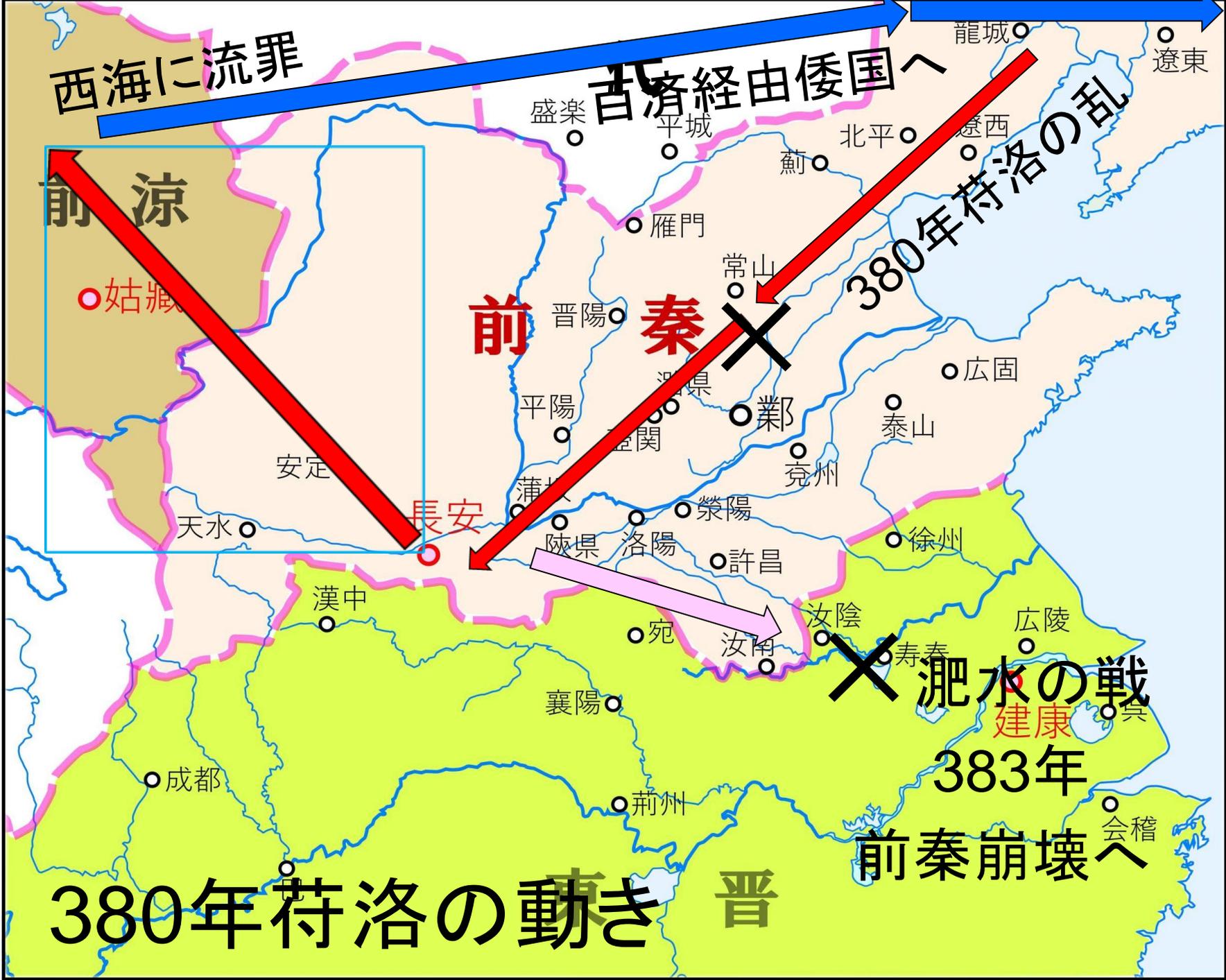
前秦

淝水の戦

383年

前秦崩壊へ

380年苻洛の動き



# 慕容垂は高句麗に勝ち安を送り込む

- 383年淝水の戦いで前秦瓦解、慕容垂は後燕自立
- 385年燕王の垂は鄴を攻め、久しく下らず～**樂浪王の温**に中山に屯せしめ～是に於いて**遠近は之を聞き**、燕を以て振わずと為し、頗る去就を懐く。
- 六月、**高句麗は遼東を寇し**、**慕容佐**～高句麗の敗る所と為り、高句麗は遂に遼東、玄菟を陥とす。
- 九月反呂光勢力は「行唐公の**苻洛**は、上之従弟にして、**勇は一時に冠たり**～」
- 十一月慕容農は龍城で兵糧を貯え、夫餘巖を降し、高句麗を討つ。平州刺史の**帶方王の佐**を徙して平郭に鎮ぜしむ。**慕容佐が句麗王安になった？**

386年高句麗擊破

慕容佐·句麗王安



龍城 ○ 遼東 ○ 遼西 ○ 北平 ○ 遼西

北魏

後燕

394年西燕擊破

翟魏

盛樂

平城

朔方

鐵弗部

雁門

中山

常山

信都

上党

平陽

鄴

黎陽

鄴城

洛陽

祭陽

許昌

譙

徐州

汝陰

汝南

宛

襄陽

荊州

會稽

吳

建康

廣陵

廣固

泰山

高平

鄆城

北地

華陰

長安

前秦

天水

武都

後仇池

漢中

成固

魏興

成都

巴

後秦

金城

勇士

西秦

姑臧

張掖

酒泉

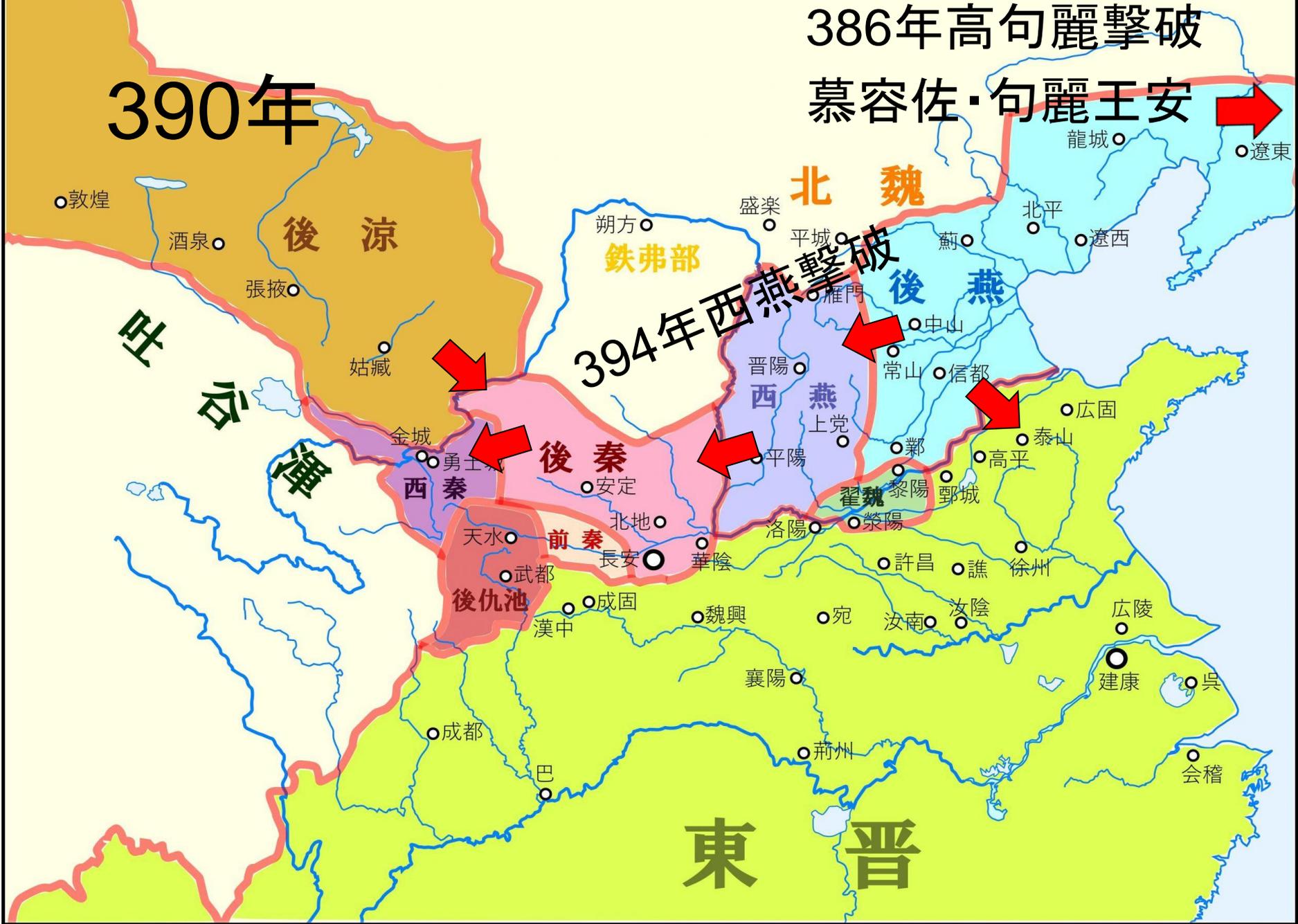
敦煌

吐谷

後涼

390年

東晉





【參合陂の戦い】●[燕軍渡河は暴風に阻まれる]八月、魏王の珪は兵を河南に治める。九月、進軍して河に臨む。燕の太子の寶は列兵を列して將に濟らんとするも、暴風起こり、其の船數十艘は漂いて南岸に+泊(-泊×)す。魏は其の甲士三百餘人を獲り、皆な釋して而して之を遣る。

▲[魏は慕容垂の病気を察知して利用]寶之中山を發する也、燕主の垂は已に疾有り、既にして五原に至り、珪は人をして中山之路に邀(むか)え使め、其の使者を伺い、盡く之を執り、寶等は數か月垂の起居を聞かず、珪は執る所の使者をして河に臨みて之を告げ使めて曰く：「若し(+なんじの意味とする)父已に死せば、何の早く歸らざるや！」寶等は憂え恐れ、士卒は駭動す。

●[北魏の万全の迎撃態勢を慕容宝は軽視]珪は陳留公の度をして五萬騎を將して河東に屯ぜ使め、東平公の儀をして十萬騎を將して河北に屯ぜしめ、略陽公の遵をして七萬騎を將して燕軍之南を塞がしむ。遵は、壽烏之子也。(6-315p)秦の興は楊佛嵩を遣わして兵を將いて魏を救わしむ。燕の術士の靳安は太子の寶に言つて曰く：「天の時は不利、燕は必ず大敗す、速かに去りて免かる可し。」

寶は聽かず。安は退き、人に告げて曰く：

「吾が輩は皆な當に屍を草野に棄て、歸るを得ず矣！」

●▲[燕軍は動揺し内乱、斥候出さず撤退して暴風]燕、魏は相い持ちて旬を積み、趙王の麟の將の慕輿嵩等は垂を以て實に死せりと為し、亂を作り、麟を奉じて主と為さんと謀る。事は洩れ、嵩等は皆な死し、寶、麟等は内に自ら疑い、冬、十月、辛未(25日)、船を燒いて夜遁げる。時に河冰は未だ結ばず、寶は魏兵を以て必ず渡る能わずと、斥候を設けず。十一月、己卯(4日)、暴風にして、冰は合す。魏王の珪は兵を引いて河を濟り、輜重を留め、精銳二萬餘騎を選びて急に之を追う。

▲【燕軍は參合陂に宿營し油断す】燕軍は參合陂に至り、大風有り、黒氣は堤の如く、軍の後より來たり、軍上に臨み覆う。沙門の支曇猛は寶に言つて曰く：

「風氣は暴迅なり、魏兵の將に之に至らんとする候、宜しく兵を遣わして之を御(+禦)ぐべし。」

寶は魏軍を去るに已に遠きを以て、笑いて應えず。曇猛は固く請いて已まず、麟は怒りて曰く：

「殿下の神武を以て、師徒之盛んにして、以て沙漠を横行するに足らん、索虜は何の敢えて遠く來たるや！而して曇猛の妄言は眾(+衆)を驚かす、當に斬りて以て徇(とな)うべし！」

曇猛は泣いて曰く：

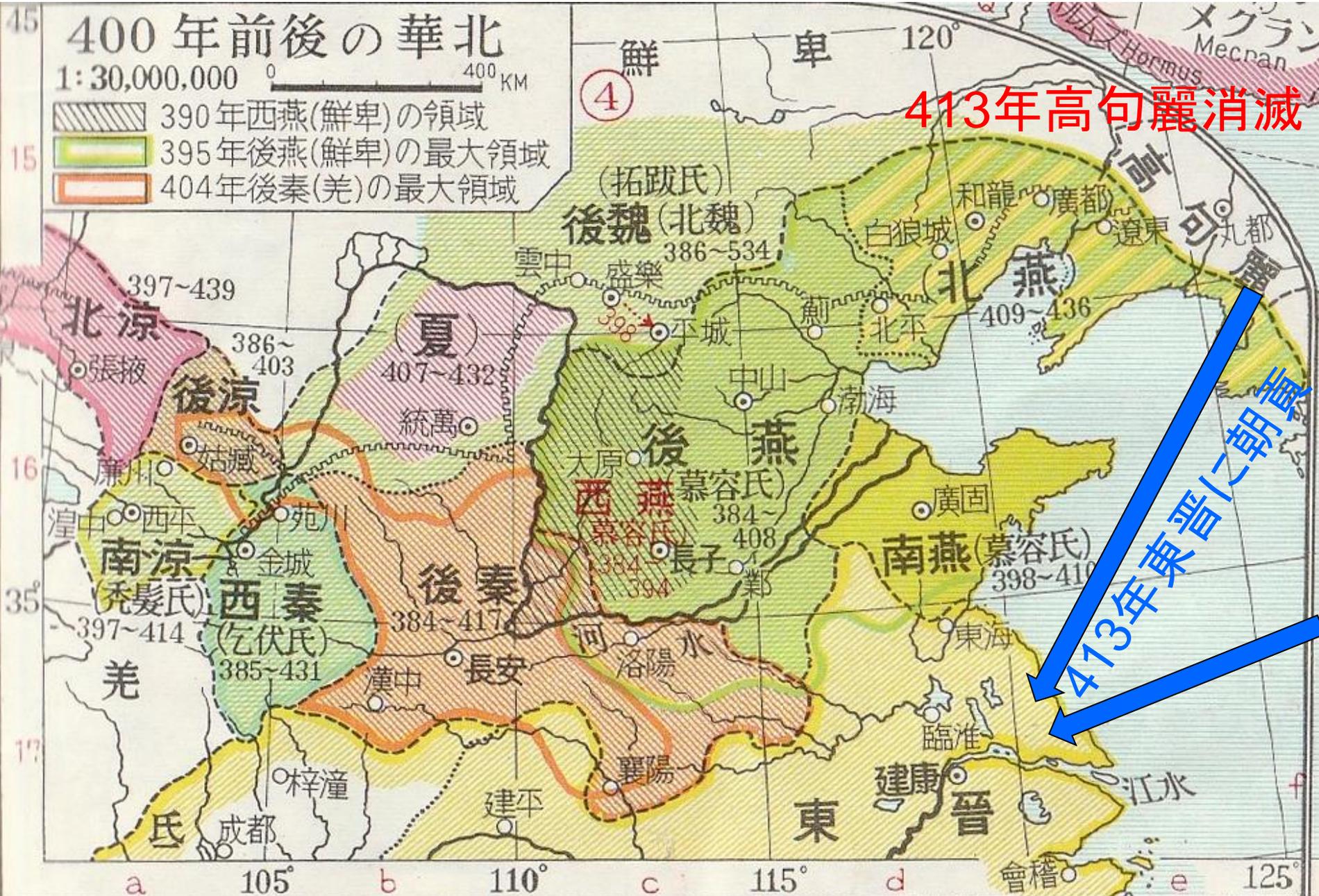
「苻氏は百萬之師を以て、淮南に敗れ、正に眾(+衆)を恃んで敵を輕んじ、天道を信ぜざる由しの故也！」

司徒の徳は寶に勧めて曇猛の言に従わしめ、寶は乃ち麟を遣わして騎三萬を帥いて軍の後に居らしめて以て非常に備える。麟は曇猛を以て赤(+為)妄とし、騎を縱(はな)ちて遊獵し、肯えて備えを設けず。寶は騎を遣わして還りて魏兵を誦(うかが)わしめ、騎は+行(-和×)くこと十餘里、即ち鞍を解きて寢ぬ。

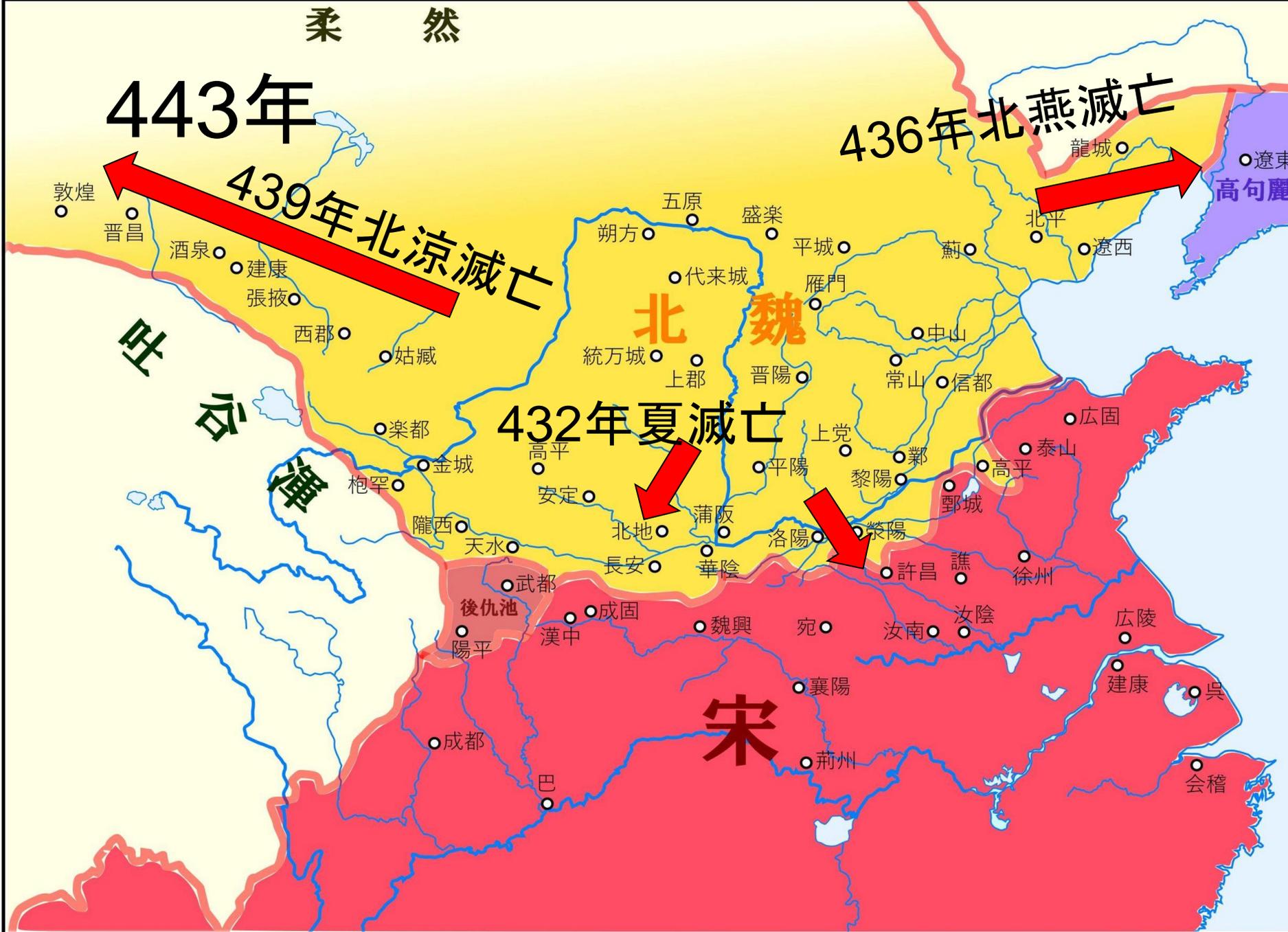
●【魏軍は參合陂の奇襲大成功】魏軍は晨夜兼行、乙酉(10日)、暮、參合陂の西に至り。燕軍は陂の東に在り、蟠羊山(山西省雁門道陽高県)の南の水上に營す。魏王の珪は夜諸將を部分し、燕軍を掩覆し、士卒は枚(ばい)を銜(ふく)み馬口を束ね潜かに進む。丙戌(11日)、日出で、魏軍は山に登り、下に燕の營を臨む。燕軍は將に東に引かんとし、顧みて之を見之、士卒は大いに驚いて擾亂す。珪は兵を縱ちて之を撃ち、燕の兵は走りて水に赴き、人馬は相い騰(のぼ)りて、躡壓(とうあつ)し溺死者は以て萬數。略陽公の遵は兵を以て其の前を邀え、燕の兵は四五萬人、一時に仗を放ちて手を斂(おさ)めて禽に就き、其の遺迸(いほう)して去る者は數千人に過ぎず、太子の寶等は皆な單騎にて僅かに免る。燕の右僕+射(-無し)陳留の悼王の紹を殺し、魯陽王の倭奴、桂林王の道成、濟陰公の尹國等文武將吏數千人を生け禽りにし、兵甲糧貨は以て巨萬を計る。道成は、垂之弟の子也。



# AD400年前後の華北、五胡の侵入







柔然

443年

436年北燕滅亡

439年北涼滅亡

432年夏滅亡

北魏

宋

遼東  
高句麗

吐谷  
浑

敦煌

晋昌

酒泉

建康

張掖

西郡

姑臧

樂都

金城

枹罕

隴西

天水

武都

後仇池

陽平

成都

漢中

巴

成固

魏興

宛

襄陽

荊州

北地

長安

華陰

蒲阪

洛陽

滎陽

許昌

鄆城

譙

徐州

汝南

汝陰

廣陵

建康

吳

會稽

廣固

泰山

高平

鄆

黎陽

鄆城

滎陽

汝南

汝陰

廣固

泰山

高平

鄆

黎陽

鄆城

滎陽

許昌

譙

徐州

汝南

汝陰

廣陵

建康

吳

會稽

朔方

五原

盛樂

平城

薊

北平

龍城

遼西

代來城

雁門

平城

中山

信都

統萬城

上郡

晉陽

中山

常山

信都

平陽

上党

鄆

黎陽

鄆城

高平

高平

安定

北地

蒲阪

洛陽

滎陽

許昌

譙

徐州

武都

成固

魏興

宛

汝南

汝陰

廣陵

建康

吳

會稽

朔方

五原

盛樂

平城

薊

北平

龍城

遼西

代來城

雁門

平城

中山

信都

統萬城

上郡

晉陽

中山

常山

信都

平陽

上党

鄆

黎陽

鄆城

高平

高平

安定

北地

蒲阪

洛陽

滎陽

許昌

譙

徐州

武都

成固

魏興

宛

汝南

汝陰

廣陵

建康

吳

會稽

<https://shijituganok.memo.wiki/>

「**宋書**」にはいわゆる「倭の五王」の朝貢記事が載っているが、

「本紀」部分や皇帝の日記である「**起居注**」にあるらしい。

しかし「**資治通鑑**」ではそこまでは載っていない。

一方「**宋書倭国伝**」には倭の五王の朝貢記事がある。

宋国内がどんな状況にあったかは、「**資治通鑑**」の編年体記述が参考になる。倭の五王が宋から貰おうとした將軍号なども、頻繁に出現

「**日本書紀**」の記述にはストレートに倭の五王は出てこない。

呉との通行は雄略天皇時代には出てくる。この3つをまずは簡単に見比べてみたい。なお

「**日本書紀**」では**457年**を雄略天皇元年に当てているが、

実際には**462年**に**安康天皇**が暗殺されているから

元年は**463年**であり、この年に**吉備の反乱伝承**が記載されている。

■は「宋書倭国伝」、●は「資治通鑑」、★は「日本書紀」、▲「三国史記」、古墳など他資料

▲413年・倭は高句麗と朝貢、人参や貂皮を持参???

■南朝宋建国、劉裕即位

■421年・「倭国は高驪の東南、大海の中にあり、世々貢職を修む。高祖の永初二年、詔していわく、『倭讚、万里貢を修む。遠誠宜しく甄すべく、除授を賜うべし』と。」

●421年(119巻)・前晋王を誅殺したなど、劉裕の権威は大きい。

▲この時期造山古墳が築かれ、吉備の古墳が最大になった時期である。

■425年・「太祖の元嘉二年、讚また司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。」  
句麗王安は司馬の職を置く

●425年(120巻)・前年2代目皇帝が廃され、太祖が立って政権安定

■438年・「讚死して弟珍立つ。使いを遣わして貢獻し、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。

詔して安東將軍倭国王に除す。珍また倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号に除正せんことを求む。詔して並びに聴す。」

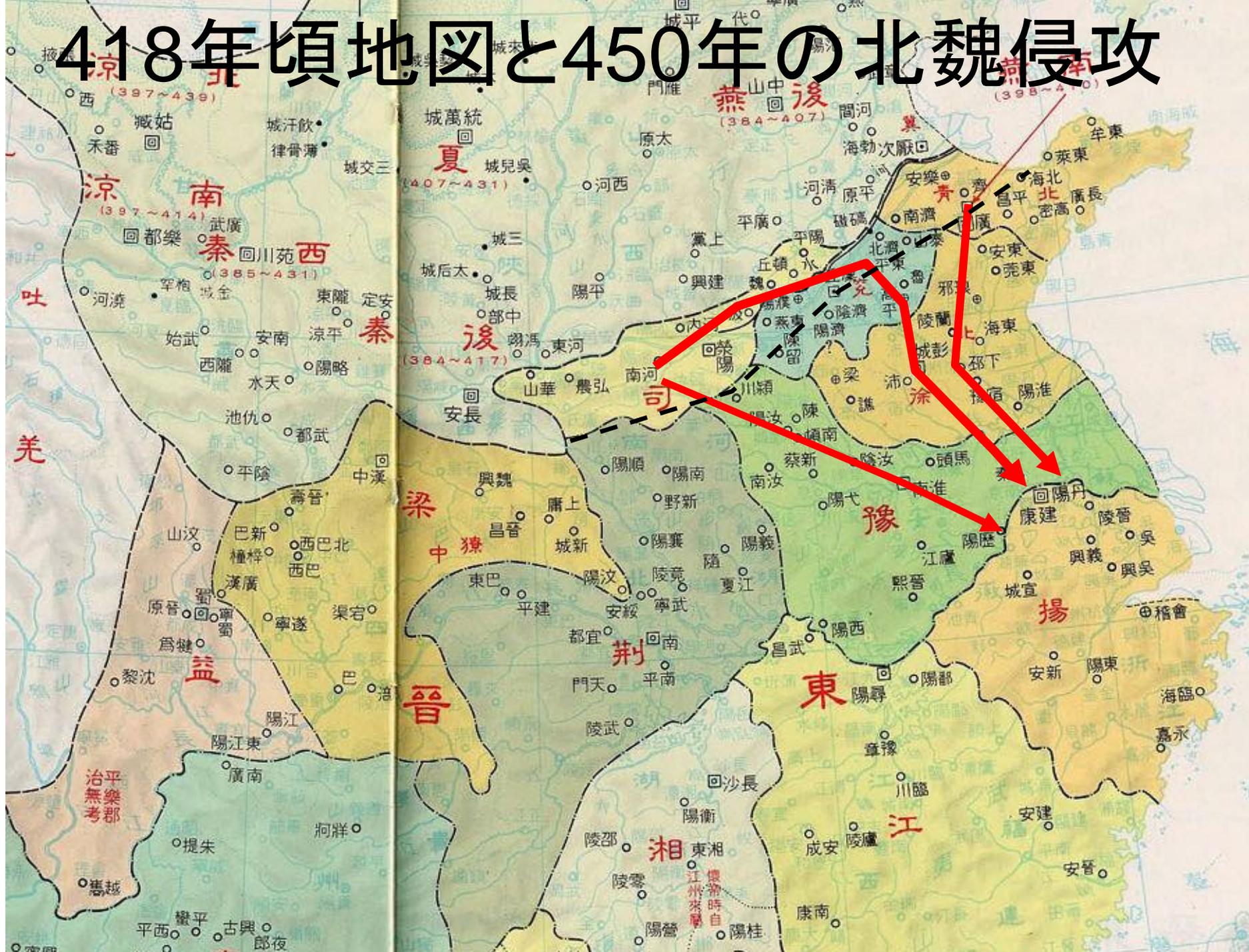
●438年(123卷)・この年燕王の馮弘は高句麗に逃亡し、宋に逃亡を謀るも、高句麗長寿王に誅殺された。

この頃高祖の善政・文芸復興は「元嘉の治」と呼ばれる。

■443年・「二十年、倭国王済、使いを遣わして奉獻す。また以て安東將軍倭国王となす。」

●443年(124卷)・この年北魏は柔然や仇地との抗争に忙しく、宋は全く平穩。

# 418年頃地図と450年の北魏侵攻



■451年7月・「二十八年、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加ふ。安東將軍は故の如し。ならびに上る所の二十三人を軍郡に除す。」

●451年(126卷)・前年北魏への侵攻するも、反抗され、年末にかけて建康対岸まで北魏に攻め込まれて、正月の朝礼も行えないほどの大混乱に陥る。そこに来た倭国朝貢使を厚遇した。

▲この使者団には当然吉備の代表もいたはずだ。作山古墳の時期である。

★457年・日本書紀雄略元年とするが、おかしい

●457年(128年)・世祖孝武帝元年この年百済は宋に朝貢し、鎮東大將軍に任ぜられる。同年百済は扶余として北魏に朝貢したが、これは北燕の流れの馮皇后に対する祝賀か。この百済の動きと百済にごく親しい雄略の動向は注目するべき。当時の倭国は允恭の存在感が薄い。

# 雄略天皇の出自？

- 即位時に八鈞白彦皇子・坂合黒彦皇子を惨殺、眉輪王と葛城圍大臣を誅殺、市邊押磐皇子をだまし討ちと一族惨殺の上で即位
- 百済との異様なほどの関係、475年百済滅亡後、昆支王の子の東城王を頭を撫でて百済王に送り出す。まるで我が子のように。昆支王=雄略？
- 重用したのは、史部身狹村主青・檜隈民使博徳らの渡来人たち
- 450年百済は馮野夫を南朝・宋に派遣。438年に滅んだ「北燕」の王族で、百済に亡命か。北燕は「天王」を称し、長谷に都、初瀬に繋がるか。馮野夫=昆支王？
- 前燕・後燕の慕容氏や句麗好太王の安氏などの陰も感じられる

# 雄略5年461年

夏四月、百濟加須利君蓋鹵王也、飛聞池津媛之所燔殺適稽女郎也而籌議曰

「昔貢女人爲采女而既無禮、失我國名。自今以後、不合貢女。」

乃告其弟軍君崑支君也曰

「汝宜往日本、以事天皇。」

軍君對曰

「上君之命、不可奉違。願賜君婦而後奉遣。」

加須利君、則以孕婦嫁與軍君曰

「我之孕婦、既當產月。若於路產、冀載一船、隨至何處、速令送國。」遂與辭訣、奉遣於朝。

六月丙戌朔、孕婦果如加須利君言、於筑紫各羅嶋產兒、仍名此兒曰嶋君。於是軍君、卽以一船送嶋君於國、是爲武寧王。百濟人、呼此嶋曰主嶋也。秋七月、軍君入京、既而有五子。百濟新撰云

「辛丑年、蓋鹵王、遣弟崑支君向大倭侍天王、以脩兄王之好也。」

★460年・1月允恭は卒し、**2月の葬儀に新羅使者**が来て「うねめはや」事件起こる。皇位継承問題があり、12月穴穗皇子が即位、安康。即日宋に使者を派遣したようだが、宋書では無視されている。

●460年(129卷)・この年、宋は比較的平穩。前年459年に高句麗長寿王に開府儀同三司を認める

■462年・「済死す。世子興、使を遣わして貢獻す。世祖の大明六年、詔して曰く、『倭王世子興、奕世戴ち忠、藩を外海に作し、化を稟け境を寧んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東將軍倭国王とすべし』と。」

★462年・前後して安康暗殺、後継争い激化の後、雄略天皇即位。

■462年・「興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王と称す。」(この部分は次の武の上表文の前段)

# 日本書紀・雄略天皇8年・464年？

八年春二月、遣身狹村主青・檜隈民使博德、使於吳國。

自天皇即位至于是歲、新羅國背誕、苞苴不入於今八年、而大懼中國之心、脩好於高麗。

由是、高麗王、遣精兵一百人守新羅。

有頃、高麗軍士一人、取假歸國、時以新羅人爲典馬典馬、此云于麻柯毗而顧謂之曰

「汝國爲吾國所破、非久矣。」

一本云「汝國果成吾士、非久矣。」其典馬、聞之、陽患其腹退而在後、遂逃入國、說其所語。

# 日本書紀・雄略天皇10年・466年？

十年秋九月乙酉朔戊子、身狹村主青等、將吳所獻二鵝、到於筑紫。

是鵝、爲水間君犬所嚙死。

別本云「是鵝、爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所嚙死。」

由是、水間君、恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻與養鳥人、請以贖罪。天皇許焉。

冬十月乙卯朔辛酉、以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村・磐余村二所。

外交記事なのに、持って帰った鶩鳥を食われたとか何とか。

★463年・雄略7年吉備下道前津屋誅殺、下道田狭の稚媛を奪い、田狭は百済に派遣されるが新羅に入って反す。

★464年・「雄略8年春2月身狭村主青・松隈民使博徳を呉国に遣わした。」この年まで即位以来8年新羅が朝貢しないので、新羅を攻めた。任那王が膳臣斑鳩・吉備臣小梨・難波吉士赤目子らを新羅に送り、高句麗を討つ。呉国へも半島情勢の緊迫で渡航は困難なはず。

★465年・雄略9年3月新羅征伐に紀小弓宿禰・蘇我韓子宿禰・大伴談連・小鹿火宿禰らを送り、小弓には吉備上道大海媛を同行させる。新羅で小弓は敗死、これを受け紀大磐宿禰が新羅に行き、蘇我韓子宿禰を誅殺。大海媛は帰国し淡輪に古墳を築く。

●465年(130卷)・宋の廢帝幼暴、8月戴法興・奚顯度・劉義恭・柳元景・顔帥伯の誅殺、山陰公主奔放。9月徐州刺史義陽王の昶の魏亡命。10月寧朔將軍の何邁反乱鎮圧。11月沈慶之閉門と誅殺。王族虐待と晉安王子勳挙兵。竹林堂廢帝誅殺。12月湘東王即位、子勳再挙兵。とこの年の後半は内乱状態に突入していく非常に不安定な状況に陥る。



★466年・「雄略10年秋9月4日身狭村主青等が、呉が献じた**鷺鳥二羽**を持って筑紫に行った。この時鷺鳥は水間君の犬に食われて死んだ。水間君は憂い恐れて鴻（ひしくい、大鳥）十羽と養鳥人を献じて罪をあがなうことを願い、天皇は許した。」

●466年（131卷）・1月鄧琬は尋陽で湘東王子勳を即位させる。薛安都味方し**朝廷はわずかに2郡**を支配に追い込まれる。蔡興宗が緩和策を取り、殷孝祖の入朝で情勢は逆転。

2月蕭道成ら進攻で東軍崩壊し殷孝祖が敗死。

3月沈攸之は赭圻補給戦で占領。7月張興世の建議で濃湖の水上戦。

8月劉胡・袁顛の逃亡、鄧琬の死と張悦の降伏。沈攸之は子勳を斬る。劉胡は逃亡し死して**一連の騒乱は終了**。

10月**世祖の子皆殺し。薛安都らが魏に降り、河東公。**

12月劉勉の壽陽包囲と殷琰の投降。

★丸々1年はほぼ内乱状態にあり、とても外国の使節が首都に到達できる状況になく、雄略の使者は、どちらに付くかと困惑し、すごすごと引き上げてきたというのが真相だろう。

★470年・「雄略14年春1月13日 **身狭村主青等**は呉国の使いと共に呉の献じた手末の才人、漢織(**あやはとり**)呉織(**くれはとり**)と衣縫の兄媛・弟媛らを率いて住江の津に泊まった。この月に呉国の来朝者のために道を造り、磯果の道に通じさせた。これを名付けて呉坂とした。」

JR吉備線の**服部駅**なども服部部の住んだところ、吉備にも来ただろう。この時期には吉備では両宮山古墳などの時期。服部の南には寺山古墳がある

●470年(131卷)・宋は6月宮中裸婦人大宴会。蕭道成は難を免れる。9月蕭道成淮陰に鎮す。比較的平和だが幼主の横暴が続き、次の齊を建てる蕭道成が実力を付けていく。

## ▲471年・稻荷山の鉄剣銘の辛亥の年

「(表)辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埜其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比(裏)其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也」

雄略の力が東日本にも及び、杖刀人などの人制が始まり、王権が強化される。

●471年(132卷)2月皇帝の行動異常、禁止語の多し南徐州刺史の晉平刺王の休祐の馬から落とし誅殺。巴陵王の休若は危機回避。5月上の病厚く休仁誅殺。7月巴陵哀王の休若誅殺。休范のみ全くす。上は蕭道成を疑い苦慮、入朝。10月垣崇祖淮北を經略失敗。皇帝の誅殺が続く。

▲472年・百濟は北魏に朝貢、上表文。北魏答礼使・邵安を派遣。邵安二度目の使者は高句麗妨害し、北魏は詰問。この頃高句麗は僧道琳を密偵として送り込む。これを受け高句麗は毎年の北魏への遣使を2度行うようになる。百濟と高句麗の対立激化は倭国を引きずり込んでいく。

▲475年(三国史記)・魏の顛祖は邵安を東來から海上で百済に送使するも、大風で到達せず。百済は度々高句麗が辺境を犯すので、北魏への朝貢中止。秋9月高句麗長寿王は兵3万人を率いて百済漢城攻撃し陥落、蓋鹵王は戦死、男女8万人捕虜、文周王は新羅援軍1万、高句麗撤退後、南下して即位。冬10月熊津に都を移す。

★476年冬(ここは1年ずれている)・高句麗王が大軍で攻め百済が滅亡。生き残りが倉下に集る。

★477年春3月・雄略は久麻那利を百済の汶州王に賜り、激励。

●477年(134卷)・宋の4月蒼梧王・後廢帝の放浪癖と虐殺趣味の恐怖。

6月蕭道成は誅殺をまぬかる。

7月廢帝・蒼梧王の殺害。蕭道成を司空、録尚書事、驃騎大將軍、

8月開府儀同三司。

12月沈攸之の挙兵。

## ■478年・(倭王武の上表文)

「順帝の昇明二年、使を遣わして上表して曰く、『封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑をツラヌキ、山川を跋渉し寧処に違あらず。

東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、  
渡りて海北を平ぐる事九十五国、

王道融泰にして、土を廓き、畿を遐にす。累葉朝宗して歳に愆ず。臣、下愚なりといえども、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を驅率し、天極に帰崇し、道百済を遙て、船舫を装治す。

しかるに句麗無道にして、凶りて見吞を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。毎に稽滞を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不らず。臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞するを忿り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄に父兄を喪い、垂成の功をして一篲を獲ざらしむ。

居しく諒闇にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息して未だ捷たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁文武功を効し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。

もし帝徳の覆戴を以て、この疆敵を摧き克く方難を靖んぜば、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸な假授して以て忠節を勧む』と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭王に除す。」

●478年(134卷)・1月沈攸之は郢城を攻め落とせず江陵に逃亡、縊死。戒嚴令解除。3月黃回に帰還。4月黃回の誅殺。8月二尚方の廃止。9月蕭道成に九爵。既に蕭道成の覇権が明確になる。

★479年夏4月・百済の汶州王が亡くなり、雄略は昆支王に2番目の末多王に筑紫の兵500を与えて「親しくねんごろに戒めて」送り届けた、これが東城王となる。

★479年8月7日・雄略天皇死す。星川皇子の乱。新羅を討つ吉備尾代に蝦夷反乱、丹波まで追いかけて誅殺。

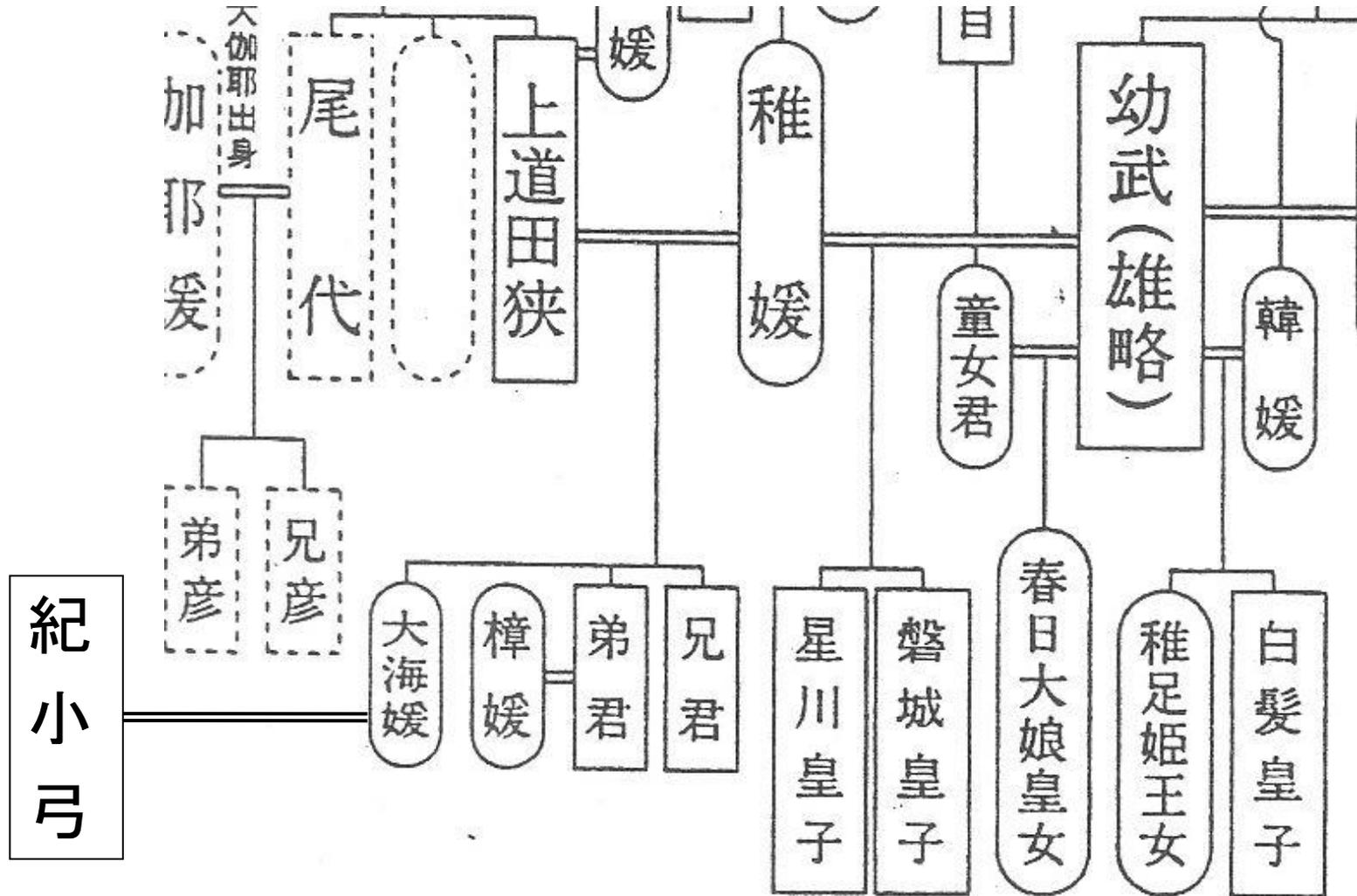
●479年(135卷)・3月蕭道成に九錫。楊運長と臨川王の綽の誅殺。王儉拔擢。4月宋の順帝禅讓。齊の蕭道成即位。嶷尚書令、驃騎大將軍、開府儀同三司、揚州刺史。

こうして雄略の亡くなったのは、宋が蕭道成に乗っ取られて滅亡する瞬間に当たり、以後南朝への朝貢が途絶える事になる。逆に宋の失墜が雄略の命取りになった可能性さえある。雄略による日本列島統一は頓挫する。

# 吉備の媛たち

- 倭迹々日百襲姫命 吉備津彦の姉、箸墓古墳に葬られる、大物主と結婚
- 兄媛(えひめ) 応神天皇の妃、葉田葦守宮
- 黒媛(くろひめ) 仁徳天皇の妃、吉備海部直の娘
- 稚媛(わかひめ) 吉備田狭の妻、雄略天皇の妃、星川皇子の乱
- 大海媛(おおしあまひめ) 雄略時代の吉備の采女、紀小弓の妻、夫の死後渡来人を引き連れ帰国、雄略天皇に夫の墓所を求める、現在の泉南の大型古墳に比定される

# 吉備の大海媛と紀小弓のラブロマンスと残された古墳の語るもの



- 天皇は田狭臣の子の弟君と、吉備海部直赤尾に詔みことのりして、「お前達は新羅しらぎを討て」
- 三月、天皇は自ら新羅を討とうと思われた。
- 紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、小鹿火宿禰らに詔みことのりして、「新羅は前から朝貢を重ねていたのに、私が王となってから身を対馬の先まで乗り出し、跡を草羅に隠して高麗の貢を妨げたり、百済の城をとったり、自らの貢物も怠っている～王師をもって攻め討ち天罰を加えよ」
- 紀小弓宿禰は、大伴室屋大連をして天皇に憂え訴えさせるのに、「私は微力と言えども、謹んで詔みことのりを承ります。
- しかし今、私の妻が亡くなったばかりで、後を見てくれる者がありません。公はどうかこのことを天皇につぶさに申し上げて欲しい」
- 天皇はそれを聞き～吉備上道采女大海を紀小弓宿禰に賜わり、付き添って世話をすることにさせられた。
- 紀小弓宿禰らは新羅しらぎに入り、進撃が目ざましかった。

- 新羅王は夜、皇軍が四面を囲んで、鼓声をあげるのを聞き、すべて占領されたと思い、数百の騎兵と共に遁走した。小弓宿禰は追撃して敵将を斬った。しかし残兵は降伏しなかった。小弓宿禰は兵を収め、大伴談連と合流し残兵と戦った。
- この夜、大伴談連と紀岡前来自目連は力闘して死んだ。談連の従者である津麻呂が、軍中に入ってその主を尋ね、「我が主、大伴公は何処にお出でになるか」と言うと、ある人が、「お前の主は敵のために殺された」と言い、屍のところを指し示した。津麻呂はそれを見て、「主人が死なれたら、生きていても仕方がない」と言い、再び敵中に入って共に死んだ。しばらくして残兵が自然に退却した。
- その後、大將軍である紀小弓宿禰は病気になって薨じた。
- 夏五月、紀大磐宿禰は、父が彼の地で死んだことを聞き、新羅に行き、小鹿火宿禰が司っていた兵馬・船官と諸々の小官を取って、自分勝手に振る舞った。小鹿火は大磐を深く憎んだ。
- そこで偽って韓子に告げて、
- 「大磐は私に語って、『自分はその中また韓子の官も取るだろう』と言っていた。気をつけた方がよい」と言った。

- 韓子と大磐には隙間ができた。百済王は二人の不仲のことを聞いて、韓子のもとに人を遣わして、「国の境をお見せしたいから、お出で下さい」それで宿禰たちは轡を並べて行った。
- 河に着いてから、大磐は馬に河水を飲ませ、韓子は後ろから大磐の馬の鞍を射た。大磐は驚き振返り、韓子を射ち落すと、川の流れにはまって死んだ。～百済の王宮に至らず引き返した。
- そこで采女的大海は、小弓宿禰の喪に従って日本に帰った。大伴室屋大連に悲しみ訴えて、「私には骸をおさむべき所が分りません。どうか良い所を教えて下さい」と言った。大連はそれを天皇に申し上げた。天皇は詔して、
- 「大將軍の紀小弓宿禰は、竜の如く登り、虎のように睨んで、天下を鎮めた。～四海を平げた。～三韓に死んだ。哀れみ悼んで視葬者を遣わそう。また大伴卿は紀卿と同じ国の近い隣りで付き合いも長い」と言われた
- そこで大連は詔を承って、土師連小鳥に墓を淡輪邑に造らせ葬らせた。大海は喜んで黙っていられず、韓奴室、兄麻呂、弟麻呂、御倉、小倉、針の六人を大連に送った。吉備上道の蚊島田邑の家人らはこれが始まりである。